

ZOCALO 2019 10▶11

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

アメリカ美術と私

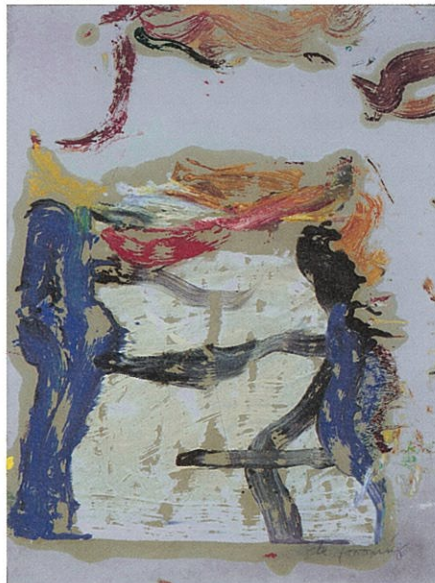
企画展「ニューヨーク・アートシーン ロスコ、ウォーホルから草間彌生、バスキアまで—滋賀県立近代美術館コレクションを中心に—」

リニューアル休館中の滋賀県立近代美術館のコレクションを中心に構成して、戦後アメリカの美術を概観する「ニューヨーク・アートシーン」展。鳥取、和歌山、徳島を巡回し、最終会場の埼玉で11月14日に開幕します。本展を発案・監修した尾崎信一郎氏は、とりわけ日本とアメリカの現代美術の専門家として数々の企画展や評論で知られています。その功績は、アメリカ美術の研究や情報がまだ一般に浸透していなかった時代から培われた深い関心と熱意に裏付けられ、多くの後進をも鼓舞してきました。本展の開催を機に、その思いの一端を寄稿いただきました。

今から40年ほど前、私が大学で美術史学を学び始めた頃、アメリカ美術は全く認知されていなかった。大学というのは想像以上に保守的な世界であり、美術史の中にすでに登記された対象しか研究することができなかったのだ。学会発表でもアメリカ美術はおろか、20世紀の美術についての発表さえほとんどなかった。そんな環境の中で私は異色のテーマを卒論の題材として選んだ。戦後まもなく関西で活動した具体美術協会である。今こそ具体美術協会と言えば戦後美術の出発点として世界的に認知されているが、当時は資料どころか作品を収蔵する美術館さえ少なく、私はま

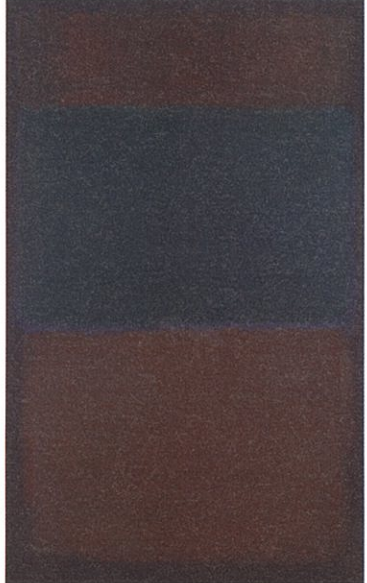
だ現役であった作家たちの個展を訪ねては作家本人からの聞き取りによって研究を進めた。当時、主任教授であった木村重信先生が作家たちと親しく、具体美術協会の活動がパリで注目を浴び始めていたといった事情があったにせよ、このような研究をよくぞ許してもらえたと思ってしまう。

修士課程に進学し、私の関心は自然に具体美術協会と同時代のアメリカの美術に向かった。ゼミの発表で私はバーネット・ニューマンやヴィレム・デ・クーニングを取り上げ、修士論文では具体美術協会とジャクソン・ポロックを比較した。1988年の美術史学会でニューマンの絵画における時間性について発表したが、おそらくこの学会で抽象表現主義が取り上げられた最初の機会であったと思う。当時、木村先生とともに指導を仰いだ辻成史先生はプリンストンで学位をとられていたから、アメリカ美術にも造詣が深く、辻先生を中心にアメリカ美術の研究会を立ち上げ、大阪のアメリカンセンターで何度か研究会を開いたことを覚えている。当時、国立国際美術館の研究員であ



ヴィレム・デ・クーニング《水》1970年 国立国際美術館蔵 © 2019 The Willem de Kooning Foundation / ARS, NY / JASPAR, Tokyo E3500

った建館長にも発表をお願いし、これが建館さんとお会いした最初の機会ではなかっただろうか。この研究会を母体として、後年、マイケル・フリードを招聘して東京都美術館でシンポジウムを開いたことも今となれば懐かしい。今でこそ、大学の卒業論文の題名にポロックやロスコの名前を普通に見かけ、学会誌のためにニューマンやステラに関する論文を査読した経験も一度や二度ではない。しかし私が大学で研究を始めた頃はこれらの作家を大学で研究すること、ましてや日本で作品を実見することなど想像もつかなかった。滋賀県立近代美術館が開館したのは1984年であり、今回の展示に出品された作品はほとんどがそれ以降に日本の美術館に収蔵されている。日本の大学で戦後アメリカ美術を研究することが可能になり、実際の優品を見ることができるようになってから実はまだ半世紀も経っていないのだ。ニューマンについて学会で発表した頃の自分に、30年も経てば国内の美術館のコレクションを用いて戦後アメリカ美術に関する充実した展覧会を組織することになるよと告げたならば、驚愕するに違いない。(尾崎信一郎 鳥取県立博物館副館長)



マーク・ロスコ《ボトル・グリーンと深い赤》1958年 大阪中之島美術館蔵 © 1998 Kate Rothko Prizel & Christopher Rothko / ARS, NY / JASPAR, Tokyo E3500

バーネット・ニューマン《無題》1966年 滋賀県立近代美術館蔵 © 2019 Barnett Newman Foundation / ARS, NY / JASPAR, Tokyo E3500

アーティスト・プロジェクト #2.04 トモトシ

2019年11月14日(木・県民の日) ~ 2020年1月19日(日)

「アーティスト・プロジェクト」は2003年にはじまり、MOMAS コレクションのなかで展開されてきた企画です。2015年度まで全8回にわたって開催され、橋本真之、佐藤時啓、関根伸夫など当館を代表する収蔵作家による特集展示を行いました。一方、2017年度からスタートした「アーティスト・プロジェクト #2.0」は、収蔵作家という枠組みにとらわれず、表現の先端を切り拓く気鋭の作家にスポットを当てる新しい試みです。

今年はアーティストのトモトシを迎え、「アーティスト・プロジェクト #2.04」を開催します。トモトシは都市空間に潜むさまざまなシステムに着目し、映像や写真、インスタレーションによる多彩な作品を手掛けてきました。作家活動をはじめてわずか5年で「情の時代 あいちトリエンナーレ 2019」(8月1日~10月14日、名鉄豊田駅下)の参加アーティストに抜擢されるなど、注目の新人作家です。

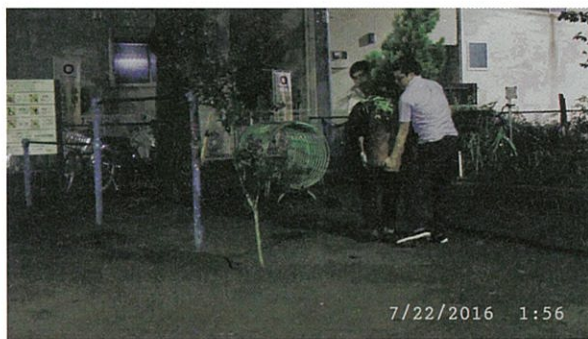
あらゆるサービスが整備された現代において、私たちは快適なもの、便利なものを主体的に選び合理的に生活している、はずですか。しかし、果たして本当にそうでしょうか？

電車で誰もが端の座席に座ろうとしてしまう現象を捉えたり(《プザービーター》)、入手場所やコンディションに応じて貨幣に値段をつけなおして売ったりする(《フルーツとしてお金を売る》)トモトシの作品群は、都市の日常にユーモラスに介入し、無名の通行人たちの行為をミニマルな反復として抽出します。そこでは、公共のルールが無意識のうちにインストール「されてしまった」私たちの身体によって、スマートな都市空間が駆動していることが示唆されています。

「アーティスト・プロジェクト #2.04 トモトシ」では、街角の公園にこっそり草を植えて、少しずつ大きな植物に植え替えていく様子を捉えた《逆パノプティコン》や、2020年にオリンピックを控えた東京で、横断歩道を渡る人々にマナーの遵守を執拗に訴える《美しい日本の私たち》などの代表作に加え、新作も発表する予定です。過去作品のスクリーニングなどイベントも開催いたします。どうぞお楽しみに。(S.S.)

トモトシ

1983年、山口県生まれ。2006年、豊橋技術科学大学建設工学課程卒業。2014年から美術作品の制作をはじめ、2017年、「ゲンロン カオス*ラウンジ 新芸術校」修了。主な個展として「わたしをもっと見て」(2014年、gallery SPACEKIDS)、「tttv」(2018年、中央本線画廊[現・画廊跡地])、「美しくあまいな日本の私たち」(2019年、目黒 rusu)がある。



《逆パノプティコン》2016年



《美しい日本の私たち》2018年